

ようこそ

読書の森へ

2013PDF版(2013年8月21日更新)

発行：東洋英和女学院大学図書館

Email: libweb@toyoeiwa.ac.jp

[表紙画像をクリックして頂くと、BookWeb 商品詳細（あらすじ、目次など）をご覧頂けます。](#)

「図書館オリエンテーション in フレッシュマンセミナー」で、提出されたブックレポート課題の中から、優れた推薦文をご本人の許可のもと掲載させていただきます。

【2013年8月21日掲載分】

No Photo

『学校ぎらいにさせないで (岩波ブックレット No.279)』
石田一宏著
(岩波書店, 1992.12)

精神神経科の臨床医として約30年間携わり、多くの登校拒否の子どもに関わってきた立場から、学校ぎらいにならないために必要な環境や大人の対応を考えた著書。

「大人というのは、子ども時代の結果なんだ」という観点より、次世代を担う子どもたちに、将来自分の人生をエンジョイし、自立した精神を持つ大人になってほしいという著者の願いがひしひしと伝わってきます。

(保育子ども学科1年 安川真未さん)



『大学生のための道徳教科書』
麗澤大学道徳科学教育センター著
(麗澤大学出版会, 2009.4)

“道徳教科書”というと堅苦しく読みにくいイメージを持つが、この本は大変読みやすい。大学生として何をすべきか、「生きる」とは何か、「いのち」とは何か。こうした疑問を、環境問題、現代の経済、食品問題など様々な方向から考え、答えを導く手助けをしてくれる。

大人でも子供でもないこの大学生という時期に、自分がどのような生き方をしたいのか、何のためにどうやって働くのかをゆっくり考えるきっかけにもなるだろう。

(人間科学科1年 小原菜奈さん)

No Photo

『魂のアイデンティティ』
西平直著 (金子書房, 1998.11)

著者が出会った1人の少年との話である。家にとじこもり、周囲との違和感を感じていた少年。しかし知的レベルが非常に高く、著者とどこか気の合う部分のあった少年は、常にアイデンティティを求め苦しんでいた。

著者と少年のやりとりから、自分自身もその話に加わって考えさせられた。少年の言うことはもつともであり、しかし日常生活の中では意識されにくいことが多いため、彼の新しい著者への相談の種を読むたびに何度も立ち止り、改めて考えさせられた。自分がなぜ生まれここにいるのか、どうして生きるのか。考えても答えの出ないような問いを考える。答えを出すためには考え続けなければならない。そのきっかけを与えてくれる1冊である。

(人間科学科1年 白子友梨さん)

No Photo

『多民族の国イギリス』
唐澤一友著 (春風社, 2008.4)

イギリスは私たちにとって、とても身近で親しみやすい国だが、知っているようで、実は知らないことがたくさんある。

この本では、イギリスの正式名称やその語源といった基礎の基礎から解説しているのだから、イギリスについてほとんど知らないという人でも理解しやすい。また、イギリスに統合される前の4つの国の歴史や文化を知ることによって、イギリスの歴史や文化についてもより深く学ぶことができる。

(国際コミュニケーション学科1年 木下優里さん)

【2013年6月18日掲載分】



『女を幸せにしない「男女共同参画社会」』
山下悦子著 (洋泉社, 2006.7)

「男女共同参画社会基本法」が施行されてから、女性にとって生きやすい日本になったのだろうか。日本では男女差別が排除されたのか疑問に思う人が大勢いることだろう。

この本は題名通り、施行されたことで女性の地位をさらにあやういものになっているのではないかとという視点に立った本である。女性である私たちが知り、行動することこそが、今の日本をより良いものとするだろう。社会で活躍していく現代の女性は一読すべきだと思う。

(国際社会学科1年 五十嵐芽生さん)



『韓国の若者を知りたい』
水野俊平著 (岩波書店, 2003.5)

韓国といったらあなたは何を思い浮かべますか？

サッカー？K-POP？それとも冬のソナタ？では、韓国の学生は日本に対してどんな考えを持っていると思いますか？

この一冊を読めば、韓国の学生生活や兵役制度のことはもちろん、日本ではありえないような韓国人の友達づきあいのことまで丸分かり！

最大の反日国であり、最大の親日国である韓国。この本を読めば、韓国に対する考え方が変わってくるはず！

(国際コミュニケーション学科1年 彦坂恵美理さん)

No Photo

『ことばの色彩』川本茂雄著
(岩波書店, 1978.3)

普段、私達は言葉話す時に、音や意味を意識するだろうか。多くの人々が何も感じない文字の羅列は、自分が思う以上に複雑な仕組みでできていて、この本を読むことによって、より深い理解を得ることができる。

それにより、日常生活におけるなんでもないような会話に、色彩を添えることができ、また、日本語の素晴らしさを感じることもできるのではないかとと思われる。

(人間科学科1年 松田葉月さん)

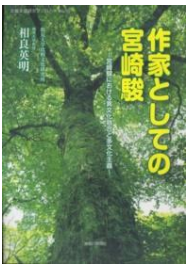


『子どもの意欲を引き出す』
チーム・ドルフィン編著
(公人の友社, 2004.1)

自分に自信がなかったり、他人の一言を気にしやすい方は、マイナスに考える面をこの本を読んでプラスに考えて欲しいと思う。

他人から学びを受けている者ならば、成績や、友人関係の悩みは避けられないだろう。そんな時、この本を読んで一から原因を考えてみたり、自分だけでなく相手の気持ちを考えたりするきっかけになるのではないかと思う。

(人間科学科1年 中條七海さん)



『作家としての宮崎駿』
相良英明著
(神奈川新聞社, 2012.3)

映像芸術として高い完成度を持つ宮崎作品ですが、そのストーリーを少し踏み込んだところから見れば、なぜ多くの人に愛されているのか、その理由を理解する手がかりになります。

ここでは『風の谷のナウシカ』から『崖の上のポニョ』までの9作品を例にとり、異文化融合と多文化主義という視点から見た「作家」としての宮崎駿について語られています。

大人も楽しめる宮崎駿の世界を少し深い所まで覗くことのできる本です。

(人間科学科1年 Y.K.さん)



『わたし8歳、カカオ畑で働きつけて』岩附由香ほか著
(合同出版, 2007.11)

私は、この本を読んでとても衝撃を受けました。児童労働がどんなに過酷で、子どもにとって危険なことなのか、改めて実感させられました。

また、このような労働は、今の社会を維持するためには仕方がないのでは、と思っていましたが、それで済ませられる問題ではないのだと思い知らされました。

この本は、今の社会を考えていくのに、新しい視点を見つけさせてくれるのでは、と思っています。是非、読んでみてください。

(国際コミュニケーション学科1年 加賀谷まどかさん)

※ タイトルの五十音順に掲載しました。